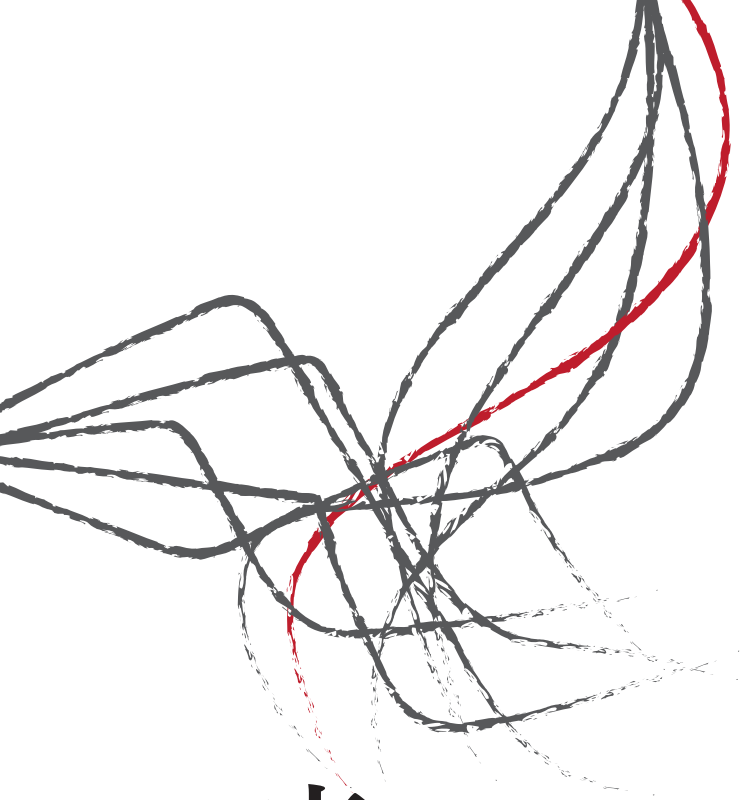
Program



音楽と非人間

第一回

会場　九州大学大橋キャンパス

音響特殊棟 録音スタジオ

1 日目：上村洋一

2023 年 7 月 22 日　18:30 開場 19:00 開演

2 日目：五島（アーキペラゴ）

2023 年 7 月 23 日　15:30 開場 16:00 開演

演奏者：八坂公洋（ピアノ）とゼミソン・ダリル（作曲・電子）

ごあいさつ

このたび、2023 年 7 月に九州大学大橋キャンパス音響特殊棟において「音楽と非人間」第 1 回公演を開催する運びとなりました。

本演奏会のテーマは、「音楽と非人間」です。今回は、前近代的で非西洋的な存在論に根差した日本の哲学と美学をもとに、「人間の音」と「非人間」を音の関係から新たな視点でひもといていきます。
初日は上村洋一氏が自ら世界をめぐり録音してきた数々の音をお楽しみいただきます。
そして 2 日目には、八坂公洋氏と本学の教員ゼミソン・ダリル氏により 1 年間長崎県・五島で録音された音源と映像をもとに、ピアノとオーディオ、ビデオのための新作「五島 (アーキペラゴ)」の福岡での初演をお楽しみいただきます。

最後になりましたが、本演奏会の開催にあたり、後援を賜りましたカナダ大使館と九州大学芸術工学部をはじめ、ご協力をいただきました各位に心より厚く御礼申し上げます。

主催者

シリーズコンセプト

今年度の「音楽と非人間」というコンサートシリーズは、3 年間の研究プロジェクトの一環で、前近代的で非西洋的な存在論に根差した日本の哲学と美学を基にして、人間の音と非人間の音の関係を新たな視点から解釈します。
作曲家たちは自然や精神的な要素との関わりを探求し、前近代の哲学や能楽の作品からインスピレーションを得ています。自然からのインスピレーションやフィールドレコーディング、伝統楽器を用いた現代音楽が交差し、不安定な時代において音楽を創り、聴き、共有する、(そして議論する)、意味のある方法を定めていきます。

MIZU to KŌRI no RYOKŌ

1 日目　7 月 22 日 (土)　19:00

演奏者　上村 洋一

曲目　MIZU to KŌRI no RYOKŌ

内容

今回は、上村が世界各地を旅しながら録音してきた音の風景を皆さまにお伝えします。日本国内であれば、北海道知床オホーツク海の流氷の音、海外ではアイスランドの氷河地帯の音、地球温暖化で減少している氷たちの音、フィンランドの太古氷河の痕跡を持つ岩の教会の音や、フィンランド北部ラップランドの凍った川、スイスのヴァルスにあるピーター・ズントー設計の温泉建築 Therme Vals などです。

Gotō (Archipelago)

2 日目　7 月 23 日 (日)　16:00

演奏者 八坂公洋（即興・ピアノ）
ゼミソン・ダリル（作曲・電子）

曲目
1. अ（ア）・地・Earth
   即興間奏曲 1
2. व（ヴ）・水・Water
   即興間奏曲 2
3. र（ラ）・火・Fire
   即興間奏曲 3
4. ह（カ）・風・Air
   即興間奏曲 4
5. ख（キャ）・空・Hollow Expanse

現在カナダ・モントリオール在住のピアニストである八坂公洋氏と、カナダ出身で九州在住の作曲家ゼミソン・ダリル氏による五島のサウンドスケープとピアノ演奏会です。
五島は世界遺産に指定されており、独自の文化があります。
遣唐使（空海を含む）の出発地であり、縄文遺跡を含む深い歴史、五島列島の独特な自然の音や、特に、隠れキリシタンの「オラショ」など音楽的に見ても興味深い場所です。
このコンサートは、1年間五島で録られた音源・映像をもとに、ピアノとオーディオとビデオのための没入型新作「五島（アーキペラゴ）」の初演です。

後援　カナダ大使館　九州大学　大学院芸術工学研究院 大学院芸術工学府 芸術工学部
本研究は JSPS 科研費 23K00215 の助成を受けたものです

思想あるいは場所としてのアーキペラゴ

アーキペラゴ（群島／列島）は、ジャン＝フランソワ・リオタールやエドゥアール・グリッサンらフランス語圏の理論家が指摘したように、異なる島々がそれぞれの文化や特殊性を持ちながら、複雑な形で相互に関連し合う境界的場所である。アーキペラゴを構成する島々は、島々を取り囲む大海原によって一体化されている一方、島々の間に横たわる海によって互いに切り離されてもいる。潮の満ち引きによって島と島の境界や距離は常に変化し、小島は見え隠れする。

それゆえにアーキペラゴは人間同士、文化同士、人間と非人間、有情と非情、従来の現実と究極的な「虚」無の場など、あらゆる二元的アイデンティティの間の曖昧さの隠喩とすることができるのである。しかし、アーキペラゴもまた、歴史や文化、言語が存在する場所である。この「五島（アーキペラゴ）」という作品は、偶発的／非意図的／非人間的な音や映像に対する私の継続的な関心の一部であると同時に、長崎沖に横たわる五島列島という場への一連の巡礼について、より大きな意味を持っている。

長崎県出身で現在モントリオールを拠点に活動するピアニスト八坂公洋（カナダ・カウンシルの助成を受けて本作を委嘱）との長きにわたる芸術的コラボレーションの場として五島を選んだのには、現実的な理由があったことも疑いないが、五島の地理と歴史はそれだけで十分魅力的であった。中国大陸と九州の間に位置するこの島々は、現在の日本列島中、最初に人が住み着いた場所の一つであり、7 世紀から 9 世紀にかけて日本が唐に派遣した、かの学術・宗教使節団の重要な中継地でもあった。密教を体系的化した形で日本に伝えた空海は、804 年および翌年に唐との往復の途次、福江島に滞在している。江戸時代、キリスト教禁令が発せられるとこの離島は信仰を守る人々の避難場所ともなったが、それでも命の危険のあるような迫害も折々加えられた。

かくの如く、古代の森の神々、現代の神道、空海の密教、その他の仏教諸派、2 世紀以上にわたってローマの指導を受けずに存続したカトリック独自の分派、そしてむろん資本主義的消費に猛進する現代の精神が、島々に特有の生態系を進化させた地質学的にもユニークな列島のうちに共存しているのである。また音楽、儀式、演劇など、これらの島々で発展し、独自の態様を見せるものもある。

2022 年から 2023 年にかけての 4 回の訪問でこうした様々な発見をしたことで、理論に対する、ある特定の場所の相対的重要性がよくわかった。この理論的なものと具体的なそれの二面を統合することでアーティスティックな何事かが顕現するのだ。

能楽の前近代存在論

訪問者（あるいは巡礼者）による場所の探索は、世界の文学によく見られるものだが、私がコンセプチュアルにも芸術的にも主なモデルとしているのは能、特に金春禅竹とその義父にあたる世阿弥が稽古した能の初期形態である。世阿弥が完成させた「ワキ能」は、有名や重要な場所に巡礼者（ワキ）がやってきて、その場所の住人に出会い、その場（あるいはその場に関係する有名人）の物語を語り、関連する有名な詩を一つか二つ詠む、というものである。やがてその住人が実は幽霊であることが明らかになる。後半、その幽霊は前半の控えめな姿から、詩や神話、魔法の時代である過去の華麗な姿に戻る。こうして、巡礼者にとっては時間が進み、反対に幽霊にとっては（21 世紀の資本主義者による標準的計算法では）時間が逆戻りするのである。幽霊はその場の顕現化した精神である。

ここでは詳しく記せないが、能の音楽的な構造（拍の構成だけでなく、より大きな音楽的･劇的な単位の構成や音色の構成（レイヤー））は本作の音楽構造にとっても非常に重要である。最も基本的なこととして、ピアニストは巡礼者であり、五島で録音・録画された音声や映像はその場所の精神のようなものを表していると考えるとよいかもしれない。また「ワキ能」同様に、この作品には物語らしい物語がほとんどない。映像はリズム表現を意図して構成されている。

作品のプロセス

この作品を作曲するプロセス自体が一種の巡礼でもあった。2022年4月から2023年2月まで、季節ごとに1回ずつ、計4回、五島を訪問した(2022年7月には本作の委嘱者でもあるピアニストの八坂氏が同行してくれた)。五島列島は小さな島も含めると百を超える島々から成るが、5つある大きな島のうちの一つか二つ、あるいは三つへ行く。春と冬は中通島と若松島（近接する島々には橋が架けられている)、冬は奈留島、秋は久賀島、秋と夏は福江島を訪れた。それぞれの場所で、宗教（特に密教、古神道、キリスト教)、考古学（特に縄文時代や遣唐使の頃)、自然条件（地質や固有植物）などに関わりを持つ場所を訪問した。これらの場所で、私はオーディオとビデオの録音・録画を行ったが、これらのフィールド・レコーディングは作品中ピアノ以外の部分の基礎となるもので、五島列島という「場所」のある種のイメージを提示することを目的としている。

しかし、アーキペラゴは単一の場所ではなく、複数の場所の集合体であるため、作品の各パートにパターンを与えるように注意を払いつつも、人間が作り出した境界線を突破するための自由さや遊び心をより高い次元で許容している。5つの主要な楽章のうち最初の4楽章は、時間を進むと同時に逆戻りもするワキ能のように、音声と映像のパートが一致していない。音声パートは春から冬へと時間を進め（ほぼ録音順)、映像は春から夏へと時間が逆戻りし、島のほぼ北から南へと進む。この最初4楽章はそれぞれ要素（エレメント)、すなわち「地」「水」「火」「風」を中心に据えてある。「火」では実際の火の録画ではなく、「燃えるものには火の要素が含まれている」と古代人が広く解釈していたことを踏まえ、本楽章では主に木や植物に焦点を当てた。

近代以前の日本の宇宙観における第5の要素は「空」、つまり「虚」や無の場所である。ここは無限の可能性を秘めた精神的な領域であり、キリスト教や仏教の聖地と最も明確に結びつくイメージや音で表現され、水に強い重点が置かれている。原初の水は万物の起源であるという概念は古神道の概念でもある（と同時に、禅竹に影響を与えた儒学の教えでは存在の比喩としても用いられている)。

「五」は、列島の主要な島の数であり、古代中国と日本の宇宙論における元素の数であり、本作の主要な楽章数でもある。しかし、密教には第六の要素があり、空海はそれを宇宙を貫く意識として認識していた。空海は音楽と音に関心を持ち、世界に対する人間の音の反応は大日如来の真言の小宇宙に合致している、と考えた。私たちは宇宙（即ち大日）を研究するのではなく、それと調和する必要があるのであり、宇宙を私たちの外側にあるものとして客観化する必要はないという。このように人間による、人間以外のものに対する自由な音の反応のなか、即興演奏は楽譜だけでなく作曲のプロセスにも組み込まれている。一年以上かけて素材を集め、その中で最も面白いと思われた音源を八坂氏に送付した。氏はピアノの前に座って私が録音した音源を初めて聴きながら即興で演奏し、さらにそれ自体を録音する。それがピアノパートの膨大な量の基礎となった。

演奏中にも即興がある。各楽章の間にはそれぞれ1分、2分、3分、5分間の間奏曲（インテルメッツォ）がある。それぞれの間奏曲のために、(ほとんどの場合）主要な島でそれぞれ1つずつ録音された、前後のエレメントとも関連を持つ5つの音源が選ばれている。どの曲を演奏するかは演奏前にランダムに決めるため、演奏の度ごとに曲の組み合わせが違ってくる。八坂氏はその場で即興的に、毎回違う組み合わせで演奏することになり、録音された音と生のピアノパートのライブ感が保たれるのである。音とは違って、4つの間奏曲の映像は7つの同じクリップであるが、映像のリズムは徐々に長くなり、7つの独立したユニークな単位から、重なり合う映像のマッシュアップへと引き伸ばされる。アーキペラゴのように、その境界線は常に変化し、そして消えていく。

今、漕ぎ出すとき

本作は五島列島という実在の場所を解釈するために、複数の哲学、宗教、認識論を駆使した、非常にコンセプチュアルな作品である。このエッセイでは本作制作の過程で得たアイディアの一部（そしてほんの一部）を記したが、最終的なオーディオ・ビジュアルの結果は聴く人それぞれが解釈するしかないことに変わりはない。私の島から、八坂氏の島から、あなたの島へと音楽・映像が流れていくとき、音と光の波が順風満帆なそれになるか、荒々しいそれとなるか、それはあなた次第なのである。

演奏者

上村洋一 / KAMIMURA Yoichi

視覚や聴覚から風景を知覚する方法を探り、フィールドレコーディングによる環境音と、ドローイング、テキスト、光など視覚的な要素と組み合わせたサウンド・インスタレーションや、絵画作品、映像、パフォーマンス、電子音響作品などを制作し国内外で発表している。フィールドレコーディングを「瞑想的な狩猟」と名付け、その行為を通して、人間と自然との内的で精神的な繋がりを探求し、近年は、地球温暖化で減少を続けている北海道知床のオホーツク海の流氷のリサーチや、フィンランドの太古氷河の痕跡、アイスランドの氷河などのリサーチを元に制作をしている。8 月にブラジル・アマゾンのレジデンス・プログラム LABVERDE に参加予定。

八坂公洋 / YASAKA Kimihiro

長崎県佐世保市出身。カナダ･モントリオールを拠点に活動しているピアニスト。12歳から本格的なピアノの指導を水谷玲子氏に受ける。長崎大学入学後、カナダの名門マギル大学に編入、ピアノ科で学部と大学院共に橋本京子教授に師事。在学中、「若く優れたピアニスト」とニューブランスウィックでのソロリサイタルの際、音楽雑誌等で報じられた。優秀な成績が認められ、ジェフリーキャンベル奨学金、ルブカ・コレッサ・アワード、エレンバロン奨学金、そしてヤマハカナダ奨学金を受賞。2014年イタリアで行われた IBLA GRAND PRIZE にて入賞。

国内外のマスタークラス / フェスティバルに多数参加し、ギルバート・カリッシュ、ラン・ラン、アンドレ・ラプラント、アンドレアス・ハエフリガー、フィリップ・モル、マキシム・ベンゲロフ、ホカン・ハルデンベルガーなどに指導を受ける。

これまでに日本、カナダ、アメリカ、イタリアそしてスコットランドで演奏しており、バロックから近現代まで幅広くレパートリーがあるが、特に近現代の曲に力を入れており、演奏は国営ラジオカナダなどに取り上げられている。これまで数々の初演をし、その楽曲はカワイ出版やジェラール・ビヨドー出版、バベル出版ミュージック・フィンランド、カナディアン・ミュージック・センターなどから出版されている。

ISME World Conference, Chosen Vale, Arkas, Acces Asie などのフェスティバルや名古屋音楽大学、愛知県立芸術大学、九州大学、香港中文大学、ゲーテ･インスティテュートなどの教育機関、並びにカナダ政府、日本総領事館などの行政機関にもゲストアーティストとして招待されている。また、現代音楽のスペシャリスト達からも信頼が厚く、井上郷子（pf）や Duo Airs などと共演している。

近年ではレコーディングアーティストとしても活動しており、1st アルバム「和のかたち」2nd アルバム「モザイク」を日本アコースティックレコードより発売。「和のかたち」はレコード芸術で準特選になった。グラミー賞受賞暦のあるサウンドエンジニア Richard King のプロジェクトの一環でレコーディングを行い、Focal Press/Routledge から出版されている "Orchestra Recording and Other Classical Music Ensembles." にショパンの Op.9 No.2 の録音が使われている。2021 年にゲーテ・インスティテュートとノリエントの世界の音楽事情を提供するポッドキャストシリーズ「TIMEZONES」にてモントリオールで活躍する若手現代音楽家の 1 人としてフィーチャーされる。

ゼミソン・ダリル / Daryl Jamieson

1980 年、カナダのハリファックス生まれ。オンタリオ州ウォータールーにあるウィルフリッド・ローリエ大のグレン・ビュアー氏、リンダ・ケイトリン・スミス氏のもとで最初の音楽的訓練を受けた。その後渡英、ギルドホール音楽演劇学校でダイアナ・バレル氏に師事（修士号）、ヨーク大ではニコラ・レファニュ氏のもとで研鑽を積む（博士号）。文部科学省の奨学生として来日後、東京藝術大学の近藤譲氏に作曲などを学んだ。令和２年度から九州大学芸術工学部で助教。第３回一柳慧コンテンポラリー賞受賞。

ゼミソンの作品は時空間に対する鋭い感覚に支えられている。能や日本の伝統音楽（特に箏）、また日本の詩歌から強い影響を受けており、現在は音楽的時間と歌枕の心理－地理学に深い興味を持っている。代表的な作品に「ヴァニタス・シリーズ」三部作がある。モノオペラ「松虫」（2014 年）、音楽演劇「フォーリングス」（2016 年）、和楽器五重奏のための「憂きこと聞かぬところありや」（2017 年）がある。他に主要な作品としては、3 つの弦楽器四重奏曲「埋木」「warm stones」「monkish fires」、舞踏家・大野一雄氏に献呈された声・琵琶・笙のための三重奏「スペクトル」、二つの大規模な室内楽作品「crystal grapeshot bouquet」及び「con tu sueño en mi sueño」、尺八による協奏曲「鎖されし闇」、短編映画「Goodbye My Son」のサウンドトラック、また声楽と箏のための作品「古代女神に扮した私」などがある。近年ではフィールド・レコーディングへの関心を強めており、2016 年にはフィールド・レコーディングとパーカッションのための作品「muons」を作曲。彼の作品はボッツィーニ弦楽四重奏団や Musiques Nouvelles、Orchestre National de Lorraine、アンサンブル室町、ピアニストの井上郷子氏、琵琶の上田純子氏、箏の吉澤延隆氏やマクイーン時田・深山氏、アルノルト・シェーンベルク室内楽団、ヨーク大学室内楽団などによって幅広く演奏されている。

ゼミソンは現在、ミュージック・シアター「工房・寂」のアーティスティック・ディレクターを務めている。東京を拠点とした国際的な作曲家集団 Music Without Borders の設立メンバー、また同時に世界中の若手作曲家の作品を、日本の聴衆に届けることを目指して活動するトリオである mmm…の共同設立者・招聘作曲家でもある。日本の伝統的な楽器のために作品を提供し続けている邦楽 2010 および日本現代音楽協会所属。

研究活動も並行して活発に行っており、京都学派の美学、現代音楽と精神性に関する論文を執筆中。2018 年、第 3 回一柳慧コンテンポラリー賞受賞。カナダカウンシル、文部科学省、ヨーク大学などからの受賞、助成多数。

音楽と非人間　第２回

日時

2024 年 2 月 11 日（日）16:00

プログラム

ジョン・ケージ：「Winter Music」と「Atlas Eclipticalis」
高橋悠治：「水に走る影」
河合拓始：「イなりうた」
他

演奏者

河合拓始（ピアノ）
西岡怜那（ピアノ）
江頭摩耶（ヴァイオリン）
宇野健太（チェロ）

詳細は peatix（https://nonhumanmusic2.peatix.com/）、SNS 等で随時公開します。

後援　九州大学　大学院芸術工学研究院
大学院芸術工学府
芸術工学部

本研究は JSPS 科研費 23K00215 の助成を受けたものです

音楽と非人間